

新 現

實

第二卷
第三號

詩 特集

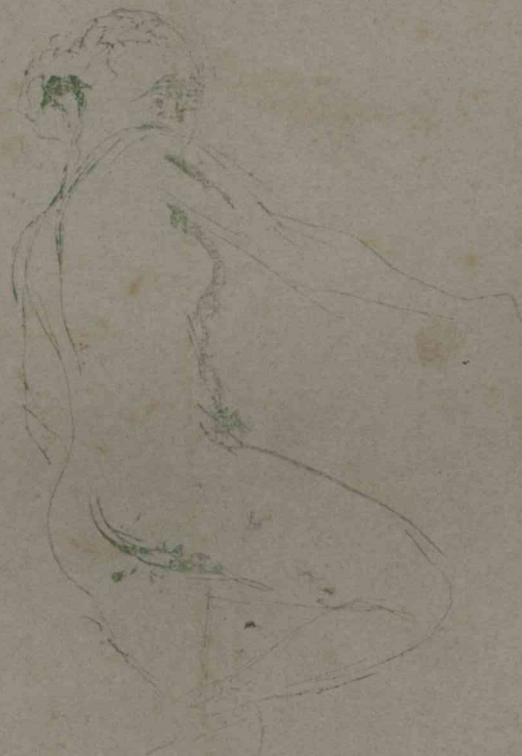
3

昭和二十四年一月二十六日第三種郵便認可
新現實 第二卷第三號(每月一回一日發行)

【新 現 實】

第 拾 集

定價參拾五圓(十二圓)





印象主義詩など

野田 宇太郎

象徴詩と云ふ日本語がある。これは必ずしも Symbolism の意ではない。もう少し適確に書けば日本象徴詩である。象徴と云ふ藝術的用語はサンボールの譯語として凡らく鵠外あたりに始まつたと思はれるが、それが所謂フランス象徴派を紹介したり論じたりする場合に使用されるのはまことに當を得た日本語であるけれども、日本の詩人にその語を當てて、象徴派とか象徴詩人などと云ふことは、その表現に多分の危険が含まれてゐることは否めない。

フランス象徴詩派がそれと意識されて紹介されたのは上田敏にはじまるが、それ以來、日本の詩にも象徴詩派が生じたことになつてゐる。それを代表する上田敏や蒲原有明（薄田泣菫や後の三木露風は別として）が象徴詩人と稱さ

れるのはまだよいのである。何故なら、少くともこの兩者は西歐の詩の影響と云ふものを直接的に感得した人々たちだからである。有明は春島集以後、イギリス詩人のロゼツチイから多く得てゐるし、ヴェルレエヌ等のフランス詩人からもそれを得てゐることは業績からも明らかである。「智慧の相者」はそれを示す。敏はもと／＼翻譯紹介を多くした人である。何れも翻譯に成功するだけの日本語彙を有した詩人であつたのである。

日本詩をきびしい言葉によつて（敢て難語とは私は云はない）高品にした有明の流れを汲んだと思はれるのは、單的には云へないが先づ白秋と奎太郎である。白秋は敢てその第一詩集「邪宗門」を象徴詩集と稱したし、奎太郎の未

刊詩集「綠金暮春調」も亦「邪宗門」が象徴詩集と稱される限りでは、より象徴にせまつた詩集である。これを象徴詩としてしまふのは甚説である。私はその象徴と云ふ言葉をあまり重要視することとはとらない。

至極大難把な云ひ方ではあるが、象徴詩といはれるものは、多分に音樂的要素を生命としたものと云へるならば、奎太郎と白秋は多分に繪畫的な要素を以て詩とした詩人たちである。それでこそ彼等は最も近代的であり得たのである。それほどサムボリズムとは對照的な内容の具象性を持ちながら、尙、日本の象徴詩の鼻祖とまで云はれる有明の流れを汲んだと云ふのは、奎太郎、白秋から逆に有明詩を観察してみると、有明詩にもその繪畫的要素が十分に含まれてゐることが容易に觀取されるからである。

私はそのことを有明先生におたづねしたことがある。すると先生は即座に、いやいや私の詩は象徴詩と云ふやうなものではない、印象主義ですよと云はれた。

然し貧弱な文藝史家は、象徴主義と云う言葉は使つても、中々印象主義詩などとは云はない。そのために、今日の文學青年は新體詩、自由詩、純粹詩といふやうに、象徴詩もその中にあると心得てゐる。有明詩の本質には内容的に繪畫要素があり、形式的に自然主義的觀想がある。自然主義は近代文學の代名詞と云つてもよいし、何もことさらな

エコオルをなすものではない。白秋の詩にもそれはある。奎太郎に於てはいよいよ判然とする有明はもと／＼畫家志望で、小説を書き詩に移行した典型的な近代文學人であつた。

有明の春島集には「朝なり」と云ふ有名な作がある。これは不潔な下町の濁り川を書いたと云ふ意味で當時は評者によつて自然主義詩と云はれた。然し不潔なこけらくずの流れる様を書かなければ町中の朝霧の中にうごめく濁り川の様相は出て來ない。むしろこれは下町の朝の繪畫的なグレイとバアケオレットのニュアンスをもつ新鮮な印象主義詩である。そのやうな場所に情調を感じることの出來た明治後期の東京下町の風物詩である。自然主義的であることは此の場合問題にはならない。丁度その詩と前後し石井柏亭は「明星」に下町の朝の河岸風景のスケッチを出してゐる。當時それをみた或人は「朝なり」の主題畫だらうと云つたさうであるが、それは全く偶然の一致であつたと云つても石井先生から直接聞いた。同時代の藝術の巧まざる趣向の一致であることは云ふまでもない。この時代の詩は文學による繪畫であつたし、繪畫は色彩と線による詩でもあつたと云つてもよい位である。この時代の藝術が豊かであつたのは、何れも大切に「詩」を抱いて藝術を自己の人生に密着せしめてゐたからである。白秋の「片戀」と云ふ詩の「あかしやの金と赤とが散るぞえな」は有明の「朱の

まだら」の中に發した着想であると云はれる（島田重二氏）のは間違ひではない。然しそれはアカシヤと云ふ木の名によるよりもむしろ金と赤といふやうな色彩の表現に多分にその影響がみられるとすべきであらう。その色彩の感覺的驅使の出所は全く別なところにもある。それはむしろ木下李太郎の詩によつてみられねばならぬ。

李太郎は「植古事」と云ふ詩を處女作として書いたが、この詩は外光派（印象派）の理論と云ふものから發想したことは、自らその詩に書き留めてゐる。又、李太郎の「録金暮春調」と云ふ縁と金の取り合せは、イギリス象徵画家のウィッスラの繪画から來てゐることは、ロオマ字で「方寸」誌に發表した「潮とウキスキイとのアランジュマン」や、當時の文章によつて判然と知られる。李太郎はこのやうに新しい繪画の實體から、色彩を分析して、その分析を詩と言葉と言葉に當て嵌め、そのアランジュマンによつて新しい美的感覺を抽出することを實驗し成功してゐる。

この拙稿では一つ一つ参考文献で例證するいとまがないので殘念であるが、學生時代に詩人として出發すると共にすぐれた美術批評家としてみとめられてゐた李太郎を同志とする白秋が、己の官能を生かすために多分に李太郎の影響を以て絢爛たる印象詩を作つたと云ふことはもすこし判然と文學史的に認識されねばならない。そして李太郎の詩

が、日東職之介の卓見の如く正確に高品として位置づけられねばならない。

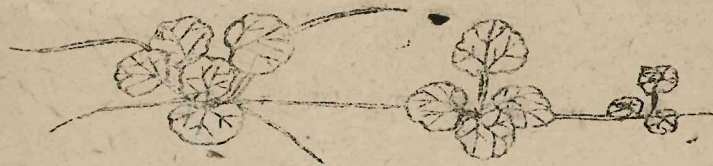
私は日本近代詩史に象徵詩と云ふものはあつてもよいと考へるが、そのためには何うしても印象主義詩と云ふものが介入すべきであると思ふ。印象主義とは云ふまでもなく西洋のアンプレッジョニスムの影響によつて生じた日本近代詩であり、象徵主義理解ではあまり成功しなかつた日本詩が、むしろこの外光派の理論によつて成功したと云ふことを強調してみたいのである。

さうすれば、或ひは今日の詩理念の頂門を突いてゐる西脇イサムも、もすこしは理解出來ると思はれる。私は何も西脇教授を印象主義詩へと云ふのではないが、西脇教授は滯歐中に朔太郎によつて日本詩にめざめ、朔太郎は有明、白秋によつてめざめたと云ふ日本現代詩の系譜が判然とすれば、西脇イサムの實驗的詩に於けるイマジの問題と、朔太郎の實踐した色と色とのアランジュマンの利用が近代東西の詩黨として意外なほどの接近を示すことにもなると私は考へる。

何れのこととは正しく論稿をつくるつもりであるが、上江りのスノビズムが流行する現代日本にも、もつとたのしい自己の詩を、自己の言葉で書く詩が一日も早く來るやうに努力したい。（四九・二・一）

己 中 田

冬



刈入れたる蒔いたのは

むかしのこと！

いまおれは爐邊にうづくまり

すぎ去つた季節をおもつてゐる

——來る春のことなど考へない

おれをあはれむ眼のいろで

柱にかけた冬ばらがみつめてゐる

それがまだおれの意識にうつゝてゐる

鶴の義齒

—日本ニユースより—

牧野 經太郎

義齒^{いれは}を入れていただきました。

これは私の武器なんです。お化粧なんです。
長い嘴ではありますが……

下だけの嘴ではどうしても

泥鰌が大變私を馬鹿にしますので

當然なんです。命を削られるおもひが
幾夜も續きました。

勿論義齒^{いれは}は人間様がして呉れたのですが、
助かりました。

泥鰌に馬鹿にされないだけでも勇氣が出ます。

鶴も義齒を入れる時世になりました

世の中はまるで手毬のやうです。

このあひだ私が義齒^{いれは}をしてゐる最中

こと珍らしさうにニユースカメラマンが
映して行きました。

そのとき思つたのです。人間様の親切も

所詮、自分の爲ばかりしてゐるやうな……と

感謝の氣分が次第に沈んでゆきました。

唄を忘れたカナリヤよりも

嘴を折つた鶴の方が——、どんなに

眩くことさへも身に迫る思ひではありませんか。

義齒^{いれは}を入れていただきました。

不充なくこの通り役立ちますが、驚きますのは
どうしてなんでしょう。

素早く逃げるように泥鰌はなつたのでせう。

小さな二つの繪

山本 沖子

ま
ひ
る

青い魚をつんで港に船がかへつたよ

私は白い布を洗つた

塀の外を馬に乗つて人が行つたよ

私の家のくづれた屋根にへんへん草がそつと生えた

村

小さな蛇がちらちらと炎のやうな舌を出してる

青い花が咲いてゐる

黄色い蝶が舞つてゐる

乗合馬車が見えてかくれた。

葉櫻のかげ

太田 菊雄

水が流れる 雲が流れる

その日その日が果敢なく流れる

少女はやがて大人になる

戀びとと子供をつぎつぎに生む

一枚 一枚 白紙は水の上に

水は瞬くひまに 押し流す

ひとは年齢をとる

おち窪んだ目に 日は傾く

暦は日に日に古くなる

花どきが去る

葉ざくらのかけから

ひとりの少年が出てくる

そしてつぶやく

……來年の花は もつと綺麗に咲きますやう

一通の手紙

林 富士馬

啓上。

前におたよりしてゐた如く僕はいま、こゝ、イエナに来てゐる。約束に従つて、イエナからの第一信を差し上げる。

いまの職業——職業だらうぢやないか——が僕には非常に辛い。かう書くと、僕はいつも不平ばかり言つてゐる男に違ひない。結局愚痴にすぎない。凡ゆることへのどうにもならぬ不満、つまり、この世界はアルカディアの理想境ではないといふ平凡な、永遠の悲歎が、絶えず僕の胸にあることを繰り返してゐるのだからね。こんな幼稚な卑怯と、僕は今迄の僕の人生に於て、とにかく一杯たゝかつて来てはゐるのだ。然し何としても僕は人間だからね。矢つ張り勞苦にはたゞ成功だけが望ましいといふ次第だ。だから僕の教える子の凡庸な才能や、幼年時代の極めて缺陷の多い取扱のために、またこゝであからさまに申し上げたくない其他の事情のために、この成功が殆んど覺束ないとなると、悲觀せざるを得ぬ

のさ。若し君が半日を授業に過し、その結果が結局忍耐以外に收穫がなく、そして後の半日、屢々相手が、結局何ひとつ覺えてくれなかつたことを知らなければならぬといふ結果であるなら、君だつて愚痴を言つてもみたくなると思ふ。卒直に言つて不愉快な毎日々々さ。でも君は認めてくれなくてはならぬ。僕はこのいま僕に與へられた條件のなかつて、出来るだけの向上を努めてゐるのだ。向上、それが何になるだらう？併し僕は毎日、朝日が窓に射し込みさへすれば、何度裏切られても、矢つ張りつねに新しい期待で跳び起き、落ち着きを持ち得る唯一の自分の時間である朝の數刻を、實に出来る限り狡猾に利用するのだ。このようにして、この夏は、僕の長篇ヒュペリオンのために過した。その最初の手紙五つだけ、ことしの初冬の「タリヤ」紙上で君も讀んでくれるだらう。僕はいま第一部だけは殆んど終つた。舊稿からは一行もとつてはゐない。青年時代から成人へ、泡立つ熱情から鋼鐵の理性へ、空想の世界から真理探究と自由の國への、大きな

推移は、僕自身のこの日常生活と結びつけて、焦らず悠つくりと取扱ふ價值があると思つてゐる。とにかく全篇をすつかり済まして了う日をたのしみにしてゐる。中途で挫折する悪い癖をよく君に指摘された來たが、今度は僕も頑張りさ。焦るな！これからはもうひとつ計畫、この方が僕の關心は強いのだが、ソクラテスの死を希臘劇の、理想と典型とのつとつて仕上げてみたいと目論んでゐる。敘情詩は春からこつち、少しばかり製作した。發表機關を僕は持たないので、例によつて、たゞシルレルに宛てた手紙のなかに同封してをいたのだが、それはまじさの出來でなかつたらしいと思ふと言ふのは、ヒュペリオンとシルレルに送つた僕の最近の手紙に對する返信から、僕が勝手に判斷してのことなんだ。シルレルは是を將來、多分彼が主宰する年鑑詩集に採用してくれることに決めてゐる。ラインハルトの年鑑とコンツ博物館のために何か送つてみないかとの君の御好意は忘れない。僕は僕自身の發表機關がつくづくほしいと思ふ。送れるか否かは目下の僕の製造力如何にあるわけだが、僕は君の申し出に對して、友として恥づかしくないものを送らなければならぬ。君の作品で君の信頼を裏切つてはならない。多分僕は美的觀念に就ての論文を讀めて送れると思ふ。この論文は、ブラトウのフェドルスに就ての註釋とも見られるし、その裏には明白な翻譯でもあるから、多分コンツ向きではあるまい。結局この論文は、美と崇高との分析を内容にした、

もので、カントの分析を簡單にしたものでもあり、シルレルが一部分は既に、優美と品位とに就ての論文に於て、行つたものに甚だ似てゐるが、シルレルのは僕の獨斷に従つて遠慮なく言へば、カントの限界線の踏み出し方が足りないと思ふ。僕は間違つてゐるかも知れない。然し僕は吟味したよ。長い間、そしていまも、カントと希臘との讀書に、僕の仕事は可成集中的である。ヘーゲルとは随分論じ合つた。このやうにして僕はいま、こゝ、イエナに来てゐる。教える子とも一緒だ。半年間位、こゝにゐることになるかも知れない。まあ、どういふことになるのか。享樂を殆んど期待してゐないし、欲してもゐない、然し僕の考では、若干、僕の修養に資する處があるかも知れない。——扱て、と、これがらが當地での話。と言つて何を言かう。フイヒデはいまだイエナの魂だ。彼ほど精神といふことに關して、精勵な人を僕は知らない。人智の極めて深遠なる領域に於て、知識の原理と正義の方則とを探究し、決定し、精神とみなじ力を以て是らの原理から太膽な結論を考へ、權力に屈することなく、おのれの決論を書きつけ、講じつけ、燃え立つ情熱と斷乎たる態度とを持して、渾然と結晶してゐるさまは、一介の貧書生たる僕には、眼前にその實例がなかつたならば、おそらく解き難き謎としか考へられないことに思える。愛するノイツフェルよ、確かに過褒ではないと思ふ。これは歴史だ。僕は毎日彼の講義を聞き、時々直接によつつかつて話をする

。シルレルの處にも、もう二つ三度出掛けたが、最初のときに、思ひもかけぬへまをやつた。僕が這入つて行くと親切に迎へられたが、その折ひとりの先客があつた。誰れだと思ふ？僕はそれを見知らぬひとに殆んど氣がつかなくなつたのだ。その客の容貌と言ひ態度と言ひ、それから大分経つてから、そのひとの話し振りと言ひ、別に何も仔細があらうとは夢にも思はなかつた。シルレルは僕の名前をその客に言ひ、彼の名前を僕にも紹介したのだが、僕は何んなにも理解しなかつた。こんなことは僕にあつても例外なのだが、冷淡に、客に注目もしないで挨拶だけを取り交し、ひたすらシルレルに氣を奪はれてゐた。その客は長いこと、一言も喋らなかつたよ。シルレルは僕の「ヒュベリオン」の断片と「運命に捧げる詩」とが掲載してある「タリヤ」紙を持つて來て僕にくれた。シルレルはそれから一寸場をばづした。その客はその雑誌を僕の前の机から取りあげ、僕の眼の前で、断片のところをめぐつてゐたが、なんにも言はなかつた。たゞ僕はその時、顔が赤くなつたのを感じた。が、それにしても、いま僕が知つてゐることをその時知つてゐたら、僕は赤くなるどころか、血の氣を失つただらうと思ふ。暫くして、客は僕の方を向いて、僕の故郷のことを尋ねた。また僕の職業のことを聞いた。僕はほんとうに滅多にそんなことはないのに、偶然、一切ことば少なに答へた。僕はへまをしてつたんだ。シルレルが再び入つて來て、僕はワイマールの劇場に

就ての話をした。客は二言三言、意見述べたが、斷乎として、それは僕に客が、どんな人物かを覺らせるに充分な程、堂々たるものがあつた。その人は陽に焼けた顔であつた。然し尙も僕は氣付かなかつたんだよ。君。それから畫家のマイエルが來た。客はこの畫家と急に喋舌になつて、種々話をし、てゐたが、それでも僕は一切悟らなかつた。此處を辭して、その日の暮れ、教授達の俱樂部で耳にしたことだが、君、ゲーテがシルレルの家に來たといふことが話題になつてゐたのだ。僕がワイマールに行くときには、天は僕の不幸と愚行とを執りなし給はんことを。その次、僕はシルレルの家で夜のお馳走になつた。シルレルは朗らかな話をして、僕の失敗を慰めてくれた。この人の、偉大な精神の籠つた話は、いつも豊富で、僕の不幸を忘れさせてくれた。

一日一日は全く僕にはたゞかひだ。次々に、又イエーナ通信をしります。いゝ天氣が毎日つく。お返事はお待ち致します。

敬具

追伸。

ロベスピエールが一命を捨てなくてはならなかつたことは、僕には正しいことに思はれ、恐らくこれはいゝ結果になるだらうと信じてゐる。人運と平和と、この二つの翼をして、離乎として來らしめよ。それは人類にとつて、永遠に不可欠のものなのだから——（一七九四年）

フリードリッヒ・ヘルデルリン

見知らぬ部室での自殺者

三島 由紀夫

骨董屋の太陽のせいで

カーテンの花模様も枯れ

家具は色褪せ 空氣は

黄色くただれてゐたので

その空氣に濡れた古鏡に

わが顔は扁たく黄いろに汚れた

……やがて死は蠅のやうに飛び立つた

うるさくかそけく部室のそこかしこから。



冬の夕ぐれ・玄武湖

黄

瀛

城門を出ると寒い風

くれかかる天そらのうす明り

あるかなきかのうす明りの中で

点々と遠近のきいろい灯の家々

余わ外套の襟を立てゝそぞろ歩く

かつての思ひ出を辿るが如く

潮の蘆荻わ風と共に冬の交響樂を奏でる

パイプの煖かさが掌を傳つて胸に對える

此の荒涼たる長堤わ何處までつゞく

恐ろしくくろづんだ城壁が歴史をかくしきつてゐる

小さな人間が疲れきつた頭を抱えて散歩する

門争・變化・季節の轉移が余の眼・余の耳をつゝく

くろづんだ風景の中で湖の光と此の長堤だけか白々しい

放うりばなしの遊艇早わ余の如く疲れている

しかも風と水の中で、びた／＼音を立てゝ

そしてもうすつかり大入道然となつた紫金山わ

あまりに頑固で保守的な象徴に過ぎない

余わあてもなく歩く

余の人生行路が展開されつゝある心の中で

思い出なんかわ今わ思うまい

全世界がすつかり枯れたような今



比處の風とうす明りわ、人のいない風景わ
人をして静けさと心強さを訓えようとしている。

黄瀛から久しぶりに手紙がきて、十ほどの詩を同封してきた。この一節はそのうちの一つである。萬感迫る状態のなかで、彼は去年は六十何枚かの繪を描いたりなどと、呑氣さうな事はかり書いてゐる。この中國的な禮儀が或る程度私には分るので却つてなんか切ない氣持にさせられる。「變つたのは時局」手紙の中のたつた一つの、このコッソとしたものが大きくひろがつて私もそのなかで眼をつぶつたりあけたりした。

黄瀛の詩は昔と變らず、日本詩の中で變な風貌をもつてゐる。彼は幾分遠慮しながら、「實は時代おくれでなかつたら、君の手をかりてそちらの雜誌に出したく……」などといつてゐる。まづいのだからまいのだから誰れにもわからないやうな相變らずのそんな詩を、そして日本語を充分驅使しての、矢つ張り「黄瀛」といふ署名なしでも分るそんな詩である。そしてまた詩とは別に詩も送つてきた彼の心の中の渦巻きを私もいくらか分る氣がする。

(草野心平)

硝子

杉山平一

月夜の道をおくると、硝子のかけらが、いくつもいくつも、行手にひかるのが見える。私は硝子が大へん好きだ。波が岩にぶち當つてくだけるのも、硝子のやうにくだける、といふ感じでうけとると、感動的になる。

私は子供の頃、工場街にゐたから、通學の途中よく小さな硝子工場を覗いてゐた。暗い工場内に、職人が、赤いどろどろの硝子をパイプのさきにつけて、風船のやうにふくらませて、色々のかたちに仕上げるのは、實際みものであつた。

あの赤く輝やく硝子の液体は、夕陽にきらきら映えるビルの窓硝子を見ると思ひ出す。日射しが弱くなると、窓硝子を通して投げる床の上の目影に模様ができてくる。透明な硝子のなかにある色々なゆがみが、はつきりあらはれて綺麗をなすのだ。

ものをよく見るには、強いライトをあてねばならないが、この世界には、弱いたづね方することによつて、その深奥をあらはし得るものゝあることを、この硝子は教へてゐた。

天才

たかはし しげおみ

おれは天才を信じなかつた

二十世紀といふものは

天才を生めやしないと

りきみかへつて煙草をふかしてゐた

おれは天才を信じなかつた

はげしい刺戟があらしつくした

この世の中に

天才が居る筈はないと

あんどして珈琲をすゝつてゐた

ある日 おれは天才を

巷に見たやうな氣がしてならなかつた

ある夜 おれはいくたりもの天才に

札を飲いだ不安にねむれなかつた

私の上に降る雪は
眞綿のやうでありました

中原中也

ぬきゆえと空き暗やとは時

優 訪 諏

私は永いこと日向で本をよんでゐた
午後……不意に雄鶏が啼き
だが 私は疲れを知らずにゐた
早く アリ・ババの利發な女中が
盗賊をころせばいいといふことだけを
それだけを願ひながら
遠く しかし すぐに訪れる幼年の未來を
そしてすぎた日を 想はうとしなかつた

私は

そんな利發な女中を持ちたいと
幾日をすごしたとか

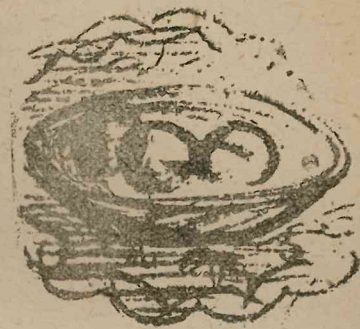
赤練瓦の 閉ざされた西洋館に

そんな女中が住んでゐるに違ひないと

何度買物時の夕ぐれをさまよつたとか

夕べの空は 砂のやうな雲を流してゐた

私の心は大きな失意に悲しんでゐた



秋

思

ゲ
ー
テ
詩
抄

大
山
定
一

窓ちかく
棚に生ひし
みどり濃き葡萄葉
垂りふさの
むらさきの實の
つぶらなる

日ごとに熟れて

初秋の

陽にかがやき

さやさやと

涼かせにそよぎ

ほのかなる

宵月のひかりにぬれ

あはれ されど

朝ごとの

しら露は

かなしきわが戀の

人知れずおとす泪にかあらむ

正義への意志 (I)

麻生良方

一、序 論

今まで、誰もか、「あたり前だ」と、無條件に肯定してきた問題、及び、肯定しようとする意志そのものに就て、もう一度、徹底的に考へ直す必要がありはしないか。或る場合には、それを根本的に破壊し盡さねばならぬ、切實な感情すら「現代」に生きる我々は持つてゐるのではない。たとへば「正義」といふ一つの言葉に就て。大正から今日にいたる、目まぐるしく變轉していつた時代の中にあつて、誰が一體、この言葉を、自己の力として持ち得たらう。

其の時代に生きた無數の近代日本のインテリゲンチヤ達は、たゞその言葉に對して、或る哲學的な身振をすることのみに耽溺し、その自慰的な行爲を、藝術的合理主義によつて、カムフラージュする術のみを學びとつた。

彼等は、人間にとつて、最も大切であるべきこれらの問題に對して、たゞ背を向けることにのみ腐心し續けてきた。

そしてその結果、これらの言葉は、いたづらに政治權力者や、軍國的權力者達のみによつて蹂躪された。

先づ「正義」を與へよ。と或るインテリゲンチヤの群は叫ぶ。

そして、一つの明確な理論と方法論とを持つイデオロギイに彼等は傾いてゆく。

更に、戦時中に於けるもう一つのインテリゲンチヤの殘黨達は、世相と現實の外に彼等の本據をかまへようとする。

さういつたあらゆる方向への岐路に立つて、僕等は先づ何を爲すべきか。

私の意圖はそこにある。現に、私の前に展開されてゐるこれらの既成の方向に對して、私は、あらゆる破壊と否定とを行はうとする。

それは私の意志であり、現存の「正義」に對する本質的な抗議と憤懣の中から生れた欲情である。

従つて私は、今たゞちに、一つの結論を與へようとは思はない。

先づ凝視せよ。私の兩足がどんな現狀の上に立つたか。かく、私は私の基礎工事の第一歩にとりかゝらう。

二、暗示としてのスピーチ

諸君。諸君は今、いかなる現狀の上に立つたか。一切の諸君の感情、總ての諸君の懷疑をなげうつて、たゞ諸君の足下を見つめ。

何があるか。そしてそれはどんな方向に流れてゆくか。

毎日々新聞紙上にけいさいされ、投書欄の聲をきくがよい。それは「正義」の聲だ。

いかに皆々「正義」が投書の持つナンセンスと同一視され、諸君が心の底から共鳴する多くの問題が、どんなに、あは

そのことは、昭和の初期から、戦争時代へとつゞく長い期間に、民衆を戦争へとかりたてたおびただしい標語や、ボスターの語句を思ひみれば、自明のことだ。

近代インテリゲンチヤは、彼等が競つて使用するそれらの言葉に、侮蔑の表情を現しながら、遂に、誰一人、自らの意志と力で「正義」を確立し得なかつた。

而も、彼等はその言葉を口にするにさへ、妙な自己嫌惡を感じてきた。

一體、そのことは何を物語るか。明らかに、政治權力に對する、インテリゲンチヤの敗北ではないか。

それは、誰彼の、戦争責任の問題ではない。更に重大な「言葉」を通しての文化史的な意義を持つ。

ところで、今はどうなのか。ここに、一つの政治イデオロギイと結びついた「正義」がある。それは、論理的正確さと、現實的時代思潮とをともなつて、僕等の足下に渦巻いてゐる。

更にもう一つの「正義」がある。戦時中に於ける政治權力の一舉の没落の間隙に乗じてアメリカリベリズムの時流に乗らうとする或る一つのグループの存在。最も紳士的な、最も文化的な表情を、彼等の「正義」は持つ。

そして民衆はどこに彷徨してゐるか。近代インテリゲンチヤは、何によつて已れを支へようとしてゐるか。先づパンを與へよ。と民衆は叫ぶ。

そしてその可能性を持ち得る方向に、民衆は大きく動揺する。

れに、身をぢぢめて社會の片隅に存在するか。

(それは正しい!) 然し現實は……。諸君はあらゆる行爲に對して、常にかゝる逆説を用意しなねばならない。

たとへば「世相」に渦巻く現實の實際。それは諸君が好むと好まざるとに拘はらず諸君の足下に押しよせてゐる。而もなを、諸君の兩足は、否、なくその渦巻の泥に深くめりこんでゐる事實!

私は先づ、その事實に基いて、「世相」を傍觀しようとする。或る特種な階級の存在を否定しよう。既成の系統と觀念の中に、からうじて生存の意義を見出し得る一つの集團からはどんな新しい「正義」も生れはしない。

諸君。今私が論述した事實は、決して諸君の日常に無縁な問題ではない筈だ。「くさい物にはふた」といふ一時的便法主義が、結果に於てどんな不幸を引起したか。それは皆て、眞近に諸君が持つた歴史が如實に證明してゐる。

いかに現實が汚物と頽廢にまみれてゐようど、一體、その外部、どこに完璧に清浄な道があるといふのか。

刮目して諸君の足にまみれる汚物の實體を凝視せよ。社會! 愚劣な群衆の心理と、その心理の最も現象の唐草模様。何時の時代でも社會とは、人間の集團し生存しひしめきあふ動物園の檻に等しい。

そして「正義」とは、その檻の鐵鎖から、人間を解放せんとする「意志」の別名である。

三、第一の闘争目標として

(二)に於ける極めて抽象的なスピーチが、一つの結論を與へるものとは、私は思はぬ。けれども、それは確かに一つの結論へのサベツと與へることは出来る。

民衆をして、或る行為に従属せしめようとする意志が、政治權力と結び付いてゐる間、その權力の勢力範囲内にある人々——一部の特權階級、及び大部分のインテリゲンチヤは一つの安定觀の上に生存することが出来る。

而も實に暫々、彼等はからうじて與へられた權力に對して自慰的な魅力と懷疑との間を彷徨することか。

戰時中に於ける彼等の——一部の最上位にあつた特權階級を除いて——虚脱せる状態を想起すればよい。絶対權力に對する僅かな憤懣は、民衆に對する僅かの優位な立場への執着と天引される。彼等は「批判」といふからうじて與へられた武器によつて、その憤懣と執着とを合理化する術を心得る。私は、最も無氣力な、沈滞したインテリゲンチヤの様相をそこにみた。

戰時中に於ける權力の没落するや、彼等は一體、いかなる意志を、自己の力として持ち得たか。等しく、光榮ある自由の下に、見事に傍觀者の群に轉落し去つたではないか。

あまつさへ、彼等是一个の責任すら負はうとはしない。たゞ、彼等が會て味はつた無氣力な安住觀への、あはれ未練と回想の中に身をゆだねる。そしてかう歎息する。(何と世の中は頹廢したか!)と。

それは彼等通行の特權的自慰觀念だ。戰爭犯罪人の判決をさく彼等の表情を見るがよい。その複雑な表情の動きから何

を讀みとり得るか。敢てこゝにその結論を與へる要もあるまい。

さらに彼等は、支柱を失つた民衆の自棄的な頹廢の身振に對して、もう一度、通用せぬ紙幣を投げ與へる。どつしてその紙幣の餌に民衆は身をゆだね得よう。その事實を知つた時彼等は再びそれを己れの身中にしまひこんで懣歎する。

(求めざる者、民衆である!)と。

ところで、これは一朝にして浮び上り、一夜にして没落してゆく一群の政治グループのみを指摘するのではない。この道化じみた芝居の一幕が、いかに暫々我々の周圍に於て起りつつあるか。

等しく、それは尙今日、大きな文化的權力を掌握してゐる存在なのだ。

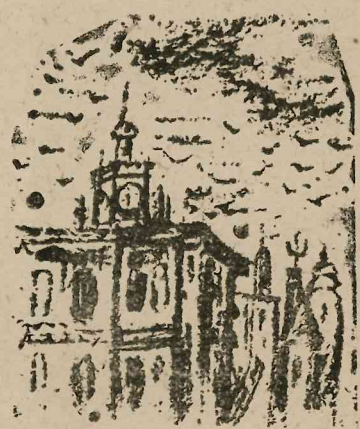
民衆は説明を持たぬ。民衆はたゞパンを與へる者にのみ追従するだらう。然しながら、誰が一體パンを與へ得る實力を今日持ち得るか。彼等は、パンと政治とを、便法的に混合して、その責任を自己の物として負はうとしない。つまり「正義」がないのだ。

民衆は、いつかは、彼等の不實のエゴイズムを鋭敏に直覺するだらう。今日の民衆の不満が、生きる意志が、綜合され理念を持ち得た時、まさしくそこから新しき「正義」の芽生えがある。

そして「世相」とは確かに民衆ののつびきならぬ身振の表現であり、抗議なのだ。

私はかく「正義」の敵を指摘し「正義」の生れるゆえんを説いた。次に私は、「正義」の敵の實態を把握しなければならぬ。(未完)

氷 雨



近 藤 芳 美

十二月八日の放逐は上海N陸軍病院の患者すべてを異様に興奮させた。寝たきりの重症者まで意味なく廊下を歩き來し、對空哨の哨舎はものしく階段をかつぎ上げられて行つた。

さうした中に緊急退院患者の名が次々に呼び上げられた。すべて病狀の軽い、胸部疾患の兵たちであつた。其の中に僕の名も交つた。それを知ると、僕は黙つて枕もとの、一年の病床生活の間にたまつた私物を整理し、日記等を焼き捨てた。今だれにも憐れまれまいとする氣持であつた。

あくる朝退院患者らはそれぞれ自分の荷をもつて、病院の庭のトラツクに分乗した。霜のきびしい朝であつた。顔色の悪い丸腰の兵隊たちは、トラツクの上に互ひの肩につかまり、テロを警戒される上海の街々を、はじめて鶏舎から出されたひな鳥のやうにおびえつつ運ばれて行つた。居留地はすでに占領され、日本兵が築くバリケードの街ごとに、外人らは長い行列を作り、表情もなく吾々の一行を見送つた。

上海を出はづれた北郊の兵舎の構内に吾々は送りとどけられた。その時はもう春を思はせる朝の日さしであつた。兵器を受けとる間吾々は廣い枯芝の上に寝て、長く禁じられて居た煙草をほしひまに喫つた。さうして一行は解散した。市街に、前線に、それぞれの母隊を追ふために。

一人、今僕は自分の母隊の所在さへ知らなかつた。

湖北の前線野戦病院に送りこまれてから一年、何よりもみじめな内科の病兵として、轉々と支那の陸軍病院を移されて行つたあいだに、いつからか、母隊と連絡はたれて居た。はげしい作戦の中、母隊は一病兵を忘れ、僕らは唯内地に送り還へされる事だけを願つてわびしい一日一日を送つて居た。

枯乏の陽炎の中に僕は立つた。今は唯ひとりであつた。ほとんど教育も受けてなかつた補充兵として、どうすればよいのかも知らなかつた。

僕は兵站の事務所に引き、自分の母隊の位置をしらべてもらつた。だが結局そこでもわからなかつた。

「あれは秘密部隊だつたからなあ」

「もうあの部隊は支那には居ないかも知れん。」居合せた下士官は鞭轡をしらべる事をあきらめて口々に云つた。

「ここに居りやいろんな兵隊が出入りするで、そのうちにお前の隊もわかるかも知れん」

ひとりの中年の軍曹が、呆然として居る僕にさう言つて頼りない返事をした。

あてられた宿舎に、僕はぬかるみをよけながら歩いて行つた。

擴聲器はひつきりなしに南方の戦ひを告げ、兵隊たちは廣い構内を落着きなく行き來した。汗ばむほどの日ざしに、彼らの階級章も兵器の金具も、すべて明るく輝き合つた。

其の中を、僕は敬禮する事もなく歩いた。顔色の悪い一病兵を今かへり見るものもなかつた。

指定された宿舎の室内にはいると、暗い中に、そこにはすでに數人の若い下士官が先に泊つて居た。凜々とした皮ゲートルに錆色の刀をつり、鮮やかな緑色の軍装は前線の生々しい匂ひであつた。彼らは集つて、受領して歸らしい新しい軍用無電機をしきりに調整して居た。無電機の真空管は淡い桃色に灯つて、彼らの稚い顔を互ひに照らして居た。

靴をぬい、板の間に上ると、僕はそのまま部屋の一歩片隅にたんであつた藁布團に行き、凭れるやうにうつ伏した。

しきりに寒氣がし、耳に聞えるほどに體に脈が打つた。又熱が出たのかも知れない。僕はそつと片手で脈を數へた。

下士官ら、無電機は桃色に灯つたまま、間もなく放送がはいつて來た。それは思ひがけなく、メンデルスゾーンの提琴協奏曲であつた。戦軍に來ていくたびか、僕はこの曲を聞いた。或る時は武昌の街に哨兵に立つた夜、或る時はアカシヤの花の散る野戦病院の庭に、遠い隔離病舎から聞えて來た夕ぐれの記憶であつた。

切々と心を裂く旋律であつた。

はげしい孤獨感に涙が湧いて來た。

一人の下士官が近付いて來るのを知ると、うつ伏したまま僕は、

「體が悪いものですから。」と告げた。彼はちよつと立ち止つたが、

「病院下番か。」と小さくつぶやいたまま、黙つて彼らの仲間の方に立ち去つた。

しかし全く偶然に、翌日、僕は同じ部隊の山田と言ふ上等兵に兵站の事務所に出會つた。僕が上海の船舶司令部に電話で連絡をとらうとして居ると、

「何や、お前も岸本部隊の兵隊かや。」と部屋の際に居た小さな兵隊が弾んだ聲をかけた。

僕は山田上等兵には記憶があつた。小隊こそ違つて居たが、人のよい、少し愚鈍な、大王が何かをして居たと言ふ現役の三年兵であつた。

「お前もこんな所へ落伍して居たんかや。いんだら隊長殿に大目玉や。うちの奴らとうに支那なんか居やせん。」蘇州の陸軍病院から同じやうに出されて來たと言ふ彼は、僕よりは母隊の消息を知つて居た。

僕は肩を抱き合ふやうに外に出た。

さうして僕は彼から、一年前に別れて、今はほとんど忘れかけて居た母隊の事を聞かされた。部隊は多くの戦友と中隊長とを失ひつつ幾たびか移動して行つた。さうして或る日より、突然大陸の戦線から姿を消した。それから先の事は彼も知らなかつた。

しかし其の事は、自分の部隊が今は新しい南方の戦争のどこかに加つて居ると云ふ別の意味でもあつた。この數日しきりに傳へられる遠い地名のどこかに、一線部隊として戦つて居ると云ふ事は母隊の性質からも當然に考へられる事であつた。重い、鉛のやうなさびしさが僕を把へた。それは加つて行かなければならない戦争の事を思つたからではない。戦争は今の實感には遠かつた。唯僕は今からののはてしない部隊追及の日々を、ぼんやりと考へたのだ。

しかし、どのやうな日だつて過ぎて行くであらう。たとへ其の日々に已れの生と死とが賭けられて居やうとも、どのやうな日だつて過ぎ去つて行くであらう。それは戦ひの中で兵隊だけの知る智慧なのだ。

部隊追及の恐しさは傳説のやうに病兵の間に語られて居た。廣い戦線を幾年もさまよつて、あげくに一人死ぬ落伍兵の運

命は、或ひは明日に病兵の運命かもしれないなかつたのだ。

だが、とにかく山田上等兵に行き會つた事は、いくらか僕の氣持を樂にした。二人は連れ立つて兵站の酒保に行き、リッ
トル壘の冷酒を分け合つた。

兵隊たちはここにもあふれ、騒然と彼らの聲をあげて居た。

よごれた萬國旗をはりわたした天井から、擴聲機はしきりに南方の戦況を告げて居た。

軍樂に交つて、マレー、ルソン、敵前上陸、轟沈などと云ふことが幾たびも幾たびも繰返へされた。其のたびに兵隊た
ちは嵐のやうな喚聲をあげた。

たれも落着きなく興奮し、怒號と皿の割れる音とが濛々としたいきれの中に止むこともなくつゞいた。

「やるんだね。」

「さうだ。何でもやるんだね。」

切れぎれな會話が脈絡もなくあたりの兵隊たちの間に交されて居た。

山田上等兵と僕とは飲み馴れない酒に早く酔つた。さうして二人は次第に無口になつて行つた。

酒保には人形のやうに稚い支那人の少女がひとり、兵隊たちからかはれつつ生きいきと立ち働いて居た。時々機械體操
でもするやうに高いカウンター臺に手を突き、のけぞつて體をそらせる。そのたびに支那服の胸に小さな乳房がふくらむ。
そのしぐさを、遠い部屋隅の卓よりぼんやりと僕は見据えて居た。

夜になつて船舶司令部の軍属の老人が、僕ら二人の兵隊を受け取りにやつて來た。

銃と風呂敷包みとをさげた二人は、彼の軍用自動車に乗せられた。軍用自動車は雪のやうに靜まりかへつた月光の上海の
街を、方角もなく疾走した。

鋭い聲に、幾たびも僕は誰何された。銃剣を光らせて窓の外より誰何して來る哨兵は、皆口髭の濃い、陸戰隊の水兵で
あつた。彼らは一樣に白い毛のスエーターを紺色の服に着こんで居た。それは遠い映畫の一齣の記憶のやうであつた。

或る街かどに自動車はとまつた。すると、このやうな夜にさへ、夜の女らは、こつこつと、車の胴をつまだたきつつ、暗
い通りをいづくかへ歩み去つて行つた。

自動車の傍らに一軒だけ灯をともした書店があつた。深い書棚には幾萬冊の書籍が美しく灯にてり映えて居た。長い事僕

はこのやうな世界を忘れて居た。

内山書店であつた。

だが其の時、鐵の鐵扉は音もなく店先に下りやうとして居た――。

其の夜僕は船舶司令部の空室に、一つだけの夜具に抱き合つて寝た。

黄浦江に臨んだベンキ塗の船舶司令部の二階に、翌朝二人は連れて行かれた。雪でも降りさうな曇つた朝であつた。

火の氣のない廣い部屋にはまだ誰も居ず、机と椅子とが鉛色に光つて居るだけであつた。

待たされる間に體が慄く、傍らの机のかどに凭れからうとするのを、だしぬけに山田上等兵は鋭くとがめた。僕はそれ
に少しうろたへた。僕はそれまで、彼が上級兵であるなど一度も意識しては居なかつた。

二人は無言で居た。何か減入るやうな、すべてを放棄してしまいたいやうな氣持であつた。

それから彼に作はれるやうに並んで、部屋つづきの當直士官室にはいつて行つた。

當直士官室には曹長が一人、冷えびえとした窓の光を背にして大机にむかつて居た。

「お前たちか。」立つて並んだ二人に、彼は眼鏡越しに鋭い一瞥をくれた。髭のそりあとの濃い、刑事か何かのやうに陰鬱

な顔の男であつた。

彼は机上の書類綴に眼を落した。

「お前たちの中隊長は戦死され、お前らの戦友は今皆南方で血を流して居る。しかもお前たちは今ごろまで――。」

低い、間をおいた聲であつた。

二人は司令部への連絡の取り方の後れた事、其の後の所置の手ぬかりについて――當然だが執拗な叱責を受けた。其のまま僕
の膝は、絶えず小さな、痙攣をつづけた。

辯解をしてはならない。辯解をすれば更に自分が慘めになるだけだ。

僕は肩の高さに並ぶ山田の顔をそつと横眼に見た。彼も少し血の氣の引いた顔をして居た。

突然に曹長は話を變へた。

「山田か。お前は何て入院して居た。」

「はあ、性病であります。」

「何。」

「あの、性病なんぞ。」

「馬鹿めが。」一喝したあとを、曹長はにやりと笑った。彼はすでに山田上等兵をともに見上げて居た。しかしそれより先に、山田は狡猾な笑顔を顔全體にうかべて居た。自分の言葉の効果を豫め知った卑屈な笑ひであつた。

「漏斗のやうになつたんじやろが。馬鹿めが。」今は冷えびえとした緊張は終つて居た。少くとも山田と曹長の間では。

「で、お前は。」僕を見る事もなく曹長は聞いた。

「胸部疾患であります。」

眼鏡ごしに、彼はちらと冷い一瞥をくれたまま、再び机上の書類に眼を落した。静かな、嫌な時間がつづいた。

眼鏡をかけた兵隊。知識階級の出だと云ふことが、いつも受けるつめたい一瞥。

ああ又だ。平手打のやうにいきなり閉め出してしまふこの社會での本能なのだ。

何々丸。何々沖何渥にて被弾。何々丸。何々海にて被雷。僕は彼の手もとの書類綴を、讀むともなくぼんやりと讀んで居た。

それから二人は彼の指示を聞いた。どこに居るかはわからないが僕らの母隊は南方戦場の前線に居た。僕らは其處迄行かなければならない。僕らは今直ちに埠頭に居る何々丸に乗る。その御用船の行く先がどこであるかは知らされない。それは機密を守るためだ。僕らは其のついた港で又次の指示を受け、又便船を得て、そのやうにしてどこ迄もどこ迄も南方のどこに居るかわからない部隊を追つて行かなければならない。たとへそれが何月かからうと何年かからうと。

「それがどんなに大變な事かはとも今お前にはわかるまい。だがとにかく、お前らは原隊に歸る外にはどうにも仕方ないのだ。それが軍紀だからだ。今後は體を大事にして、無事原隊まで歸りなさい。」

最後に少ししんみりした調子で彼はかうつけ加へた。

さうして二人の兵隊は外に出た。銃と風呂敷包みをさげ、雨外套を肩にまいて。

今にも降り出しさうな曇りが、渦をなして流れる黄浦江の上に重たく垂れて居た。あたりには人一人居なかつた。二人は歩調をそろへて、白々と光るバンドの道を埠頭の方に歩いて行つた。

二人は丁字形に川に突き出した棧橋のはしに立つて銃を下した。

そこには眞黒に船體を塗つた舊式の御用船が一隻、まるで修理を待つかのやうに汚い姿で繫船されて居た。船にはだれも居ないやうに見えた。これじやろか、山田上等兵は不安げにふりむいた。鵜はしきりに、鋭い聲にくもりの中を飛び交した。

御用船の船艙には野戰郵便局の軍屬らが、すでに何日も出航を待つて倦み疲れて居た。

彼らの間に僕ら二人は狭い場所を作つてもらつた。陽に焼けた土方のやうな軍屬の間に交つて、僕ら二人の退院兵は、みすばらしいほどに弱々しく見えた。

船艙司令部の建物を出て以來、山田上等兵は目に見えてふさいで來た。僕と彼とは並んで、軍屬らの脚のあいだに寝て眼を閉じた。

今は何をやる氣もなかつた。

かうして何日か寝て居れば僕らはどこか知らない港につれて行かれるであらう。其處で又知らない次の運命を待てばよいのだ。今其の上に何を考へる事があらう。

どのくらい経つたであらうか。夕ぐれ近くなつて御用船は、突然にがたがたと身をふるはせ出した。寝て居る船艙の下を引つかくやうに錨索がはしり出した。

船はやがて出港した。エンジンの音がやうやくととのつて來た。

だが、それから間もなく、船艙の擴聲器は全員上甲板に直ちに集合の命令を告げてひびいた。

僕らはいぶかる軍屬に交つて階段を上つて行つた。

すでにうすぐらい夕昏れてあつた。甲板に出た僕らの顔を、いきなり冷いものが流れた。霏々と降る氷雨であつた。大粒な雪を交へて、いつからか江上に降り出した氷雨であつた。

眼鏡もくもる冷さの中に、僕は御用船が上海を出外れたばかりの黄浦江の沖あひに、速力を落して居ることを知つた。

灰一色の氷雨の彼方に、ぼんやりと暮れ方の上海の市街が望まれた。高層建築は窓々にすでに灯をちりばめて居た。

黄浦江は鉛色の濁流を、渦巻きつつ、船の行手へ行手へと流して居た。

氷雨時にはげしい風を交へ、やうやくに對岸も見えないまでに降りしきつて行つた。

襟首に流れ入る雨に外套の襟を合せて、僕らは狭い甲板をつたつて歩いた。何處に雨をさけ得る場所はないかと思つて。

さうして僕は機關室の上家にあたる所まで来た。氷雨の流れる鐵板の上家が、機關室の熱氣をうけて、ほのかにあたかであつた。僕はその壁にもたれるやうに並んで立つた。

氷雨は次第に暗く降りしきつて行つた。手足も顔も感覺を失ひさうなさむさの中に、唯機關室の上家に凭れた背中だけかまのぼのと、何か別のもののやうにあたかであつた。

小さな換氣窓から僕は機關室を見下した。機關室は立ちこめた湯氣の中に、明るく灯り合つて居た。何か遠い思ひ出のやうな明るさであつた。そこには知らない憩いと平和とがあるやうな、深い吐息のやうな明るさであつた。

このやうな日もかつてはあつたのだ。かうした平和の一隅も吾々の生活の中にはあつたのだ。僕はひとりだけの回想をいたはるやうに、小さな換氣窓からしばらく深い機關室を見下して居た。

だがそのとき、「英靈船に敬禮。」と呼ぶ號令が、暗い甲板のどこからとまなく傳へられた。

灰一色に降りしき氷雨の中を、まるで羽根を張つた鳥のやうな船が、いきなりに黒く川上から姿を見せて来た。

其の船はやがて吾々に近づき、數十米はなれた沖合を、影の如く過ぎやうとした。

幾萬の兵の遺骨を、日本につんで歸つて行く英靈船であつた。

英靈船は黒白の幕を甲板の四方に垂れ、そのために異様にふくれ上つた形をして居た。幕は氷雨にはらみ、濡れ切つた船の上には、人の姿一つ見えなかつた。さうして、上甲板迄高くつみ上げられた遺骨箱は、一つ一つが白く見分けられるほどであつた。

ひととき嵐のやうに氷雨は狂つた。雨は外套を通して下着にまでしみ透つた。

二つの船は胸をしぼるやうな汽笛を、灰色の水と空とに鳴り交した。

英靈船はやがて行き過ぎた。降り狂ふ氷雨の彼方に、ふくれた鳥のやうな、黒い不吉な姿を消すやうに。

いつか黄浦江は昏れ切つて居た。

どこへとも知れぬ航行をつづけるために、再び船のエンジンに勢ひ出した。雨の中を人々は黙つて暗い甲板を傳ひながら船に歸つて行つた。外套も軍帽も今はしぼるほどに濡れた。

「俺たち、どこに行くのやうか。」

「……。」

口に耳に流れ入る雨に、何も見えない漆黒の中、唯一つ背中を傳つて来る機關室の不思議なぬくもりに、僕の心はいつか虫のやうにうつろにならうとして居た。

(四九・一・二)

◇編集後記◇

☆「新現實」の第十期目の本報は同人會によつて、特種紙となし、編輯責任の一割を、同人の森田君に任し、從つてこの編輯も、森田君が「藝術作品の如く」一層の確定であつたことは、前報の發售目次にも發表してゐた通りであるが、森田君が遂に病氣になり、僕が代つてこの後記を綴ることになつた。

この「特種紙」の、同人が同人以外の御好意による御寄稿も、又作品採用も、すべて森田君の意圖通りに従つて、彼が病氣になつてからは、彼の指圖に従つて、本報を編んだのである。それは僕達にとつては、思ひもかけぬ大變な負擔であつたが、とにかく、この第十期を豫定に從つて、特種紙として、諸君の前に提出する。充分な御批判を乞ふ。森田君は詩人として、この三十二頁に、ひとつのゆめを託して、おのれのいのちの可能性を試みてみるつもりであつたと思ふが、僕は實のところ、この出来上りに失望を感じてゐる。僕

述の可憐性といふのが、具體的なものになると、この程度なのか。前報の次號發售は、充分な責任を以て發生したが、野間宏と伊東靜雄氏の約束した原稿は、出版出来なかつた。僕は全く迷惑した。その代り、草野心平氏の御厚情と同人の良方の努力で、思ひがけず實業家の作品に久し振りに接することが出来た。僕達のヤナリズムの成立といふことも、こんな風にゆけつたものらしい面白くなると思ふ。草野心平氏と別に僕は又僕の特人黃瀬への深山の思ひ出と感謝とを持つてゐる。早く、こんな僕のもの、こんな文章を、こんな編輯記として、發表出来る様に、この「新現實」を育て上げたいと、これは同人の一人としての僕だけの抱負である。こんな風に筆が滑り出すと、書きたいことはきりがなくなるから僕はやめる。

☆「新現實」も、もうこゝで十冊を出す。こんな風に、營業資本に依存しないところの、文藝同人雜誌が音のやうに同人各自の小遣錢の出し合

三月號「新現實」 第二卷

昭和四年一月三十一日第三種郵便物認可
昭和四年二月二日印刷納本
昭和四年三月一日發行
價 三十五圓(千二百)

發行人 牧野徑太郎
編輯人 林 富士馬
印刷所 牧野印刷所
印刷人 牧野 良司

發行所 新現實社
昭和四年四月九日(二四四號)

第二十二期目午後五時より本社で同人の集會
第四日曜の午後一時より所定會場にて
法文の會(是次會場を下さい)